



聖なるものを求めて

日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・サビエルは一五〇六年に生まれた。

昨年（一五〇六年）はちょうど生誕五百年の節目の年に当たり、その機会に彼の生誕地、スペイン北部のナバラ州サビエル城を巡礼した。そして帰国と同時にこの巡礼記を始めさせてもらった。現在は二千年前、キリスト教と深い関係にあったトルコ巡礼記である。

現在（一五〇六年）は二年三カ月だったが、日本宣教のためには関係が深い中国での宣教の必要性を痛感し、中国に向かう。が、中国大陸を目前にしながらか上川島で病死した。享年四十六歳だった。その後、サビエルのほかに大勢の宣教師が来日し、客死した。

現在、日本のカトリック信徒数は約四十五万人、プロテスタントと合わせても約百十三万人。当時のキリスト教の勢いがわかる。一五八七年、豊臣秀吉は伴天連追放令を出す。徳川時代に入って迫害は激しくなり、一六四〇年ごろまでに殉教者の数は一万人を超えたと言われる。そのうちの百八十八人が、来年十一月二十四日、長崎で列福される。

その一人、ペトロ岐部は一六二二年、バチカンで開かれたサビエルの列聖式に参加している。このことを知った時、私たちはみんな大きな歴史の流れの中を、何らかの関わりを持って生きているのだと改めて痛感した。

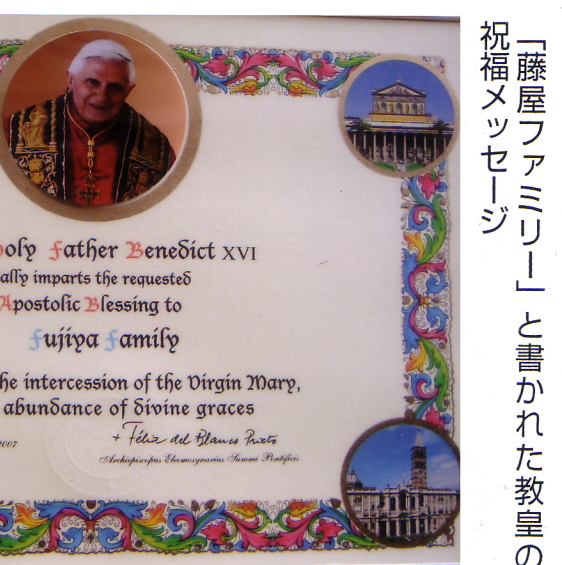
サビエルの遺がいはいンドのゴアにあるポム・ジエズ聖堂に、右腕はローマのジエズ聖堂に、また右肩からひじままでの骨はマカオの聖ヨセフ修道院にある。聖なるものは神・仏や偉大な先人だけではない。大自然の営みなどを含み聖なるものに近づき、有限な自分の生きる意味を悟る、それが巡礼ではないだろうか。

このホテルはかつてサビエルたちが創立したイエズス会の修道院



サビエル城近くのイエズス会修道院は今、ホテルとして使われている＝山口教会の村田孝子さん提供

を越えた。



十月の末から教皇ベネディクト十六世への謁見などヨーロッパ三カ国に巡礼の旅をする予定だったが、急病になって参加できなかった。

精神的なものは軽視され、合理的商業主義が中心となり、聖なるものへの畏敬の念が失われている。来年も聖なるものを求めて巡礼記を書き続けさせてもらいたいと思っている。皆様も聖なる良い年をお迎え下さい。

（元山口放送取締役ラジオ局長）